

# 「森林空間リフレッシュの森」創造について

上田・大門森林事務所 ○西村 周子  
業務課森林活用係 滝澤 禎恵

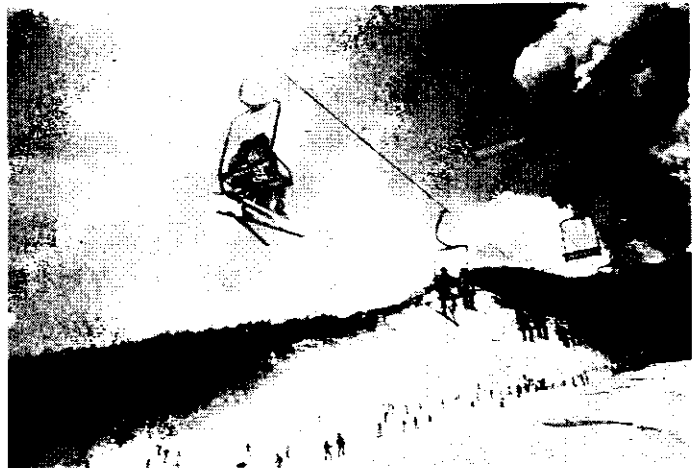
## 要旨

近年、国民の緑への憧れはますます強まっている。こうしたなか多くの人々が訪れるスキー場において、このエリアを「森林空間リフレッシュの森」と位置づけ、自然景観との調和、四季を通じた自然とのふれあいの場の創造を目的とし、修景緑化施業を実施した。

この森造りは、利用目的、地域等の要請、林況、地況等を踏まえ、スキー場が事業実施主体となり、より居心地の良い空間を訪れたスキーヤーに提供するところにある。本研究は、その実施結果ならびに考察である。

## はじめに

現在国有林を利用しているスキー場は全国で約220カ所あり、全国のスキー場約730カ所の、三割に及ぶ。我が営林署管内にも8つのスキー場がありスキー場の貸付収入は、平成6年度約8千万円、我が署の収入の、約22%と大きなウエイトを占めている。これらのスキー場は、「森林空間利用林」と呼ばれ、国民の保健機能を果たす場所として、利用されている。これまでスキー場開発というと、「森林伐採＝自然破壊」という見方をされてきた。またスキー場自身も、冬場のゲレンデのみを重視する傾向にあった。しかし、スキー場全体を見てみると、周辺の森林は鬱蒼<sup>うっそう</sup>としていて見た目も悪く、夏場は閑散としている。こうした現状にあるスキー場を、これからは、国民のゆとりある生活の実現の場として、改めてその「役割と在り方」を考えるべきである。



写-1

## 1. 目的

さてそうしたなか、上田営林署管内・大門山国有林にある、エコーバレースキー場・プランシュたかやまスキー場において、常緑の植物などを植栽する「修景緑化施業」を計画した。山林の中にあるスキー場を緑化するという一風変わった施業に聞こえるが、この周辺の森林景観はカラマツで統一され非常に寒々しく、グリーンシーズンにおいても単層の林は寂しい。こういった林は、スキー場開



写-2

発により施業という点では手控えられていたため、健全な林とは言い難く、我が署管内に多く見られる。また、スキー場側にとっても、国有林であるためむやみに手を加えるわけにもいかず、この部分はデッドスペースであった。今後、緑への憧れがさらに強まっていく中で、最も多く人が訪れるスキー場の景観を見直し、また四季を通じて楽しめる環境づくりを目指そうと考え「森林空間リフレッシュの森」を造ることにした。

## 2. 実施方法

この「森林空間リフレッシュの森」造りについて、両スキー場をお願いしたところ、「これから20年後、30年後のスキー場の在り方、そして地域との調和、グリーンシーズンの利用等を考えた結果、今やっておかなければならない。」と、快く引き受けてくれた。現在、両スキー場周辺の林は、第1回目及び2回目の間伐期を迎え、手入れを必要としている。そのため、これらのスキー場周辺のカラマツの単層林を、スキー場に協力を願っ

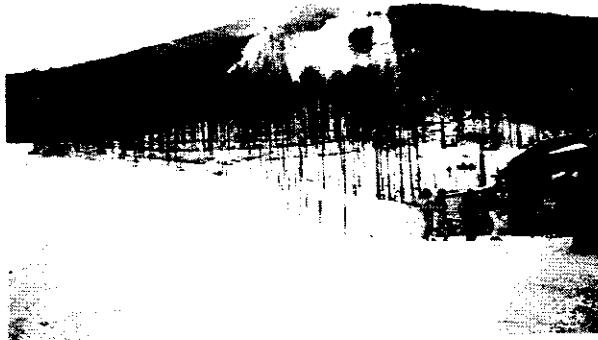


写-3 着手前

て除伐を行なってもらい、我が署の収穫予定内で、間伐を実行し、うっぺいした林に光を入れてやる。次に、無造作に伸びた枝を払い、下層を整理し、地拵えに近いものを行う。こうして、ある程度整えられた林に、周辺の国有林からの緑化木を修景木として植栽し、針葉樹、広葉樹の針広混交の、多段林林相を目指す。これら全てはスキー場サイドの経費で賄われる。このようにして、スキー場が事業実施主体となり、「森林空間リフレッシュの森」は造られ、目的にふさわしい森林の創造に着手し始めることとなった。平成5年5月、本格的施業に先駆け両スキー場にて記念植樹を行った。次いで平成6年よりエコーバレースキー場、平成7年からはブランシュたかやまスキー場にて本施業を実施している。

### (1) ブランシュたかやまスキー場

エリア全体の面積が340ha、国有林率は97%



写-4

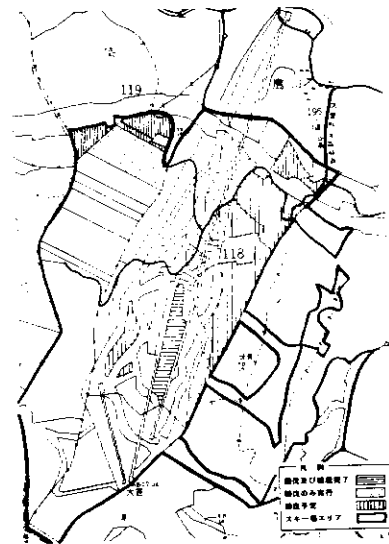


図-1

## (2) エコーバレースキー場

エリア全体の面積が204ha, 国有林率は99%



写-5

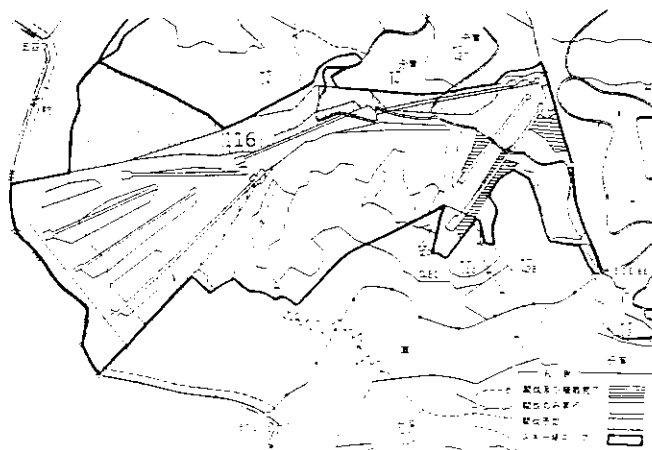


図-2

ア. エコーバレースキー場内に設定したプロットについて

### (ア) 実施手順

a. 平成6年6月伐採木と保残木に分け調査を行った。

本来経費の関係などにより、伐採は列状が主流だが、修景を目的とするため点状で行った。この時相対照度は5%である。

b. 9月本調査結果に従い伐採を行った。この時相対照度は50%である。

c. 11月周辺の国有林より緑化木を調査し、モミ、シラカンバ、レンゲツツジなどの採取をした。

d. 伐採区域内には、陰樹であるモミを林内に、シラカンバ、レンゲツツジなどの陽樹を、ゲレンデに面した日のよく当たる林縁に、植栽した。

樹種の選定理由・モミは、常緑で雪景色にも映え、さもすれば北欧の景色を思わせる。シラカンバは、県木であり、幹が白く四季を通して楽しむことができる。レンゲツツジは、遠くから見ても近くにおいても楽しむことのできる花を咲かせる。今後は、長門町の町花である、ミツバツツジなどの郷土樹種、ナナカマドなど、実を付け、鳥が啄む食餌木を、植えていく予定である。



写-6 伐採



写-7 植栽

### (イ) プロットの概要

上層のカラマツは林齢30年生である。

35%の伐採率で間伐を行った。自然に生えてきた広葉樹は、ほとんど残した。

下層に植栽したモミの樹高は人の背丈ぐらいある。結果、このような林相になった。

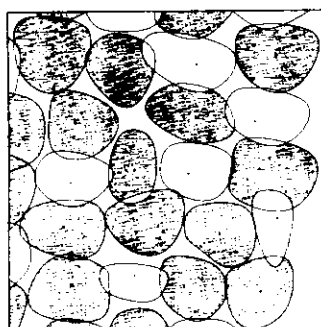


図-3

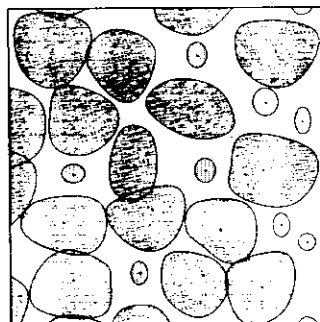


図-4

### 3実施効果・問題点

「森林空間リフレッシュの森」について、訪れたスキーヤー（ボーダー）に意見を聞いてみた。

「（現地で意見を聞いて、テープでながす。）

（男）すっきりして綺麗になりました。

リフトに乗っても気持ちがいいですよ。また、夏になったら家族とでも弁当を持って来たいですね。

（女）言われるまで気付きませんでした。いいと思いますよ。今は下に植えた木が小さいけれど、大きくなったらきっと素晴らしい景色になると思います。」



写-8

このように、効果があったと思えるような意見を、また研究者としては喜ばしい感想を、得ることができた。しかし、この事業による営林署の直接の収入でみれば、間伐材販売86,000円、緑化木販売は、3年間で約130万円と多額とは言えず、またスキー場においても、直ちに利益として跳ね返ってはこない。そのため、スキー場に協力を要請しても、快く引き受けてくれるとは限らない。けれども、目先の経済効果を生む施設よりも、より居心地の良い空間を、スキー場利用者には必要不可欠であり、「森林空間リフレッシュの森」を創造することは、将来的に、スキー場利用者の増加に結び付くものと確信している。以上の様な考えを、多くのスキー場に理解していただき、その「質」をより充実させるため、「森林空間リフレッシュの森」の創造を、各地で積極的に取り入れていくべきである。

#### 4 今後の展望

最近においては、緑とふれあうゆとり、潤いのある生活を実現させるため、良好な森林空間の保全形成が、特に求められている。そのため将来的にはスキー場に止まらず、森林空間利用林の中に在る施設、例えばキャンプ場、林間学校、保養所などの中や周辺の林、またこのほか、幹線道路や遊歩道の周辺などにも、多くの「森林空間リフレッシュの森」を造り、人々が緑と親しめる場、やすらげる場、憩いの場を提供していきたい。この事業の積極的な展開は、利用者の、理解のもとに、応分の協力が得られることにも、つながるものと考えている。具体的な今後への取り組みとしては、ブランシュタかやまスキー場内の、現在間伐が終了した区域を利用して、第八回上小森林祭を開催する。この緑の祭りは、上田営林署、長門町、上小地方事務所、上小林業振興会が主催し、今春5月、地元の小学5年生を含む、約500人が参集する予定である。



写-9 着手後



写-10 森林祭予定地

おわりに

このように、より多くの方々に、「森林空間リフレッシュの森」について知っていただき、親しんでもらうことができるよう、スキー場と共に努めていきたいと思う。最後に、この「森林空間リフレッシュの森」造りに協力していただいた両スキー場並びに、関係者の方々に心より感謝申し上げます。